

## 滋賀・新宮神社遺跡

しんぐうじんじや

- 1 所在地 滋賀県甲賀郡信楽町大字黄瀬
- 2 調査期間 二〇〇〇年(平12) 四月～二〇〇一年三月
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 畑中英二
- 5 遺跡の種類 宮跡関連遺跡
- 6 遺跡の年代 八世紀中頃
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(水 口)

新宮神社遺跡は、紫香楽宮推定地である宮町遺跡から南に約1km、甲賀寺跡(史跡紫香楽宮跡)から北に約1kmの地点に位置し、信楽谷から宮町遺跡に至る狭い谷の入口にあたる。調査は第二名神高速道路建設に先立つもので、二〇〇〇年度は約七五〇m<sup>2</sup>を対象として実施した。

調査の結果、奈良時代中頃を中心とする時期の掘立柱建物三棟・井戸・溝・橋

脚・旧河道などを検出した。掘立柱建物はいずれも三間×二間で、東西棟一棟、南北棟二棟がし字型に配される。井戸は径約1mの杉の丸太割り抜きの井戸枠をもつ。奈良時代中頃の遺構には建て替えは認められず、短期間のうちに出現し、廃絶したものとみられる。東西に走る幅約5mの旧河道には幅八・五mの橋脚が架けられており、橋脚の南に道路東側溝とみられる溝がある。西側溝については削平され遺存していないが、道路幅員はおそらく一二m程度であったと考えられる。南は甲賀寺、北は紫香楽宮に通じるもので、地形的にみると紫香楽宮に至る主要道の一つであったと考えることができる。

出土遺物には、須恵器・土師器からなる土器類と、木簡・木杵・舟形木製品・横櫛・曲物・柄杓などからなる木製品があり、旧河道内の幾つかの廃棄ブロックから出土している。木簡は、旧河道の橋脚から下流へ約5mの地点から一点出土した。伴出した木材について年輪年代測定を行なったところ、天平一五年(七四三)・一六年の年代が出ており、天平一六年の紀年銘をもつ木簡とともに遺跡の存続年代を示唆するものとなっている。土器類についても八世紀中頃には限定でき、宮町遺跡と同様に、在地産をほとんど含まず平城京経由で持ち込まれたとみられるもので占められる。また、これらの中には転用硯として用いられたものが顕著にみられ、遺跡の性格を示唆するものとなっている。このように、今回検出した遺構は、

紫香樂宮（天平一四年～一七年）に関連するものと判断することができる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「<上総国山辺郡  >」

|| 天平十六年十月<」

270×34×6 031\*

ほぼ完形で出土したが、墨痕がほとんど残らず、かすかに浮き上がった文字痕をもとに釈読した。

木簡の釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏・吉川聡氏からご教示を得た。

(畑中英二)